

緑の地球ネットワーク 2015 黄土高原ワーキングツアー 体験記

2015. 4. 11 ~ 4. 17



認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク (GEN)

552-0012 大阪市港区市岡 1-4-24 住宅情報ビル 5F

TEL. 06-6576-6181 FAX. 06-6576-6182

E-mail gentree@s4.dion.ne.jp

URL <http://www.gen-tree.org>

【日程】

4月11日(土)	朝、日本出発。正午、北京空港着。列車で大同市へ	明珠国際商務酒店
4月12日(日)	南天門自然植物園で活動	明珠国際商務酒店
4月13日(月)	午前、懸空寺見学、渾源県呉城村アズ植樹・見学 呉城村で昼食。午後、小学校で交流	
4月14日(火)	緑の地球環境センターで活動	雁北賓館
4月15日(水)	午前、采涼山、カササギの森見学 午後、新栄区得勝堡村万里の長城見学	雁北賓館
4月16日(木)	午前、雲崗石窟見学 午後、万人坑・口泉植物園見学 スーパーで買い物 夜行列車で北京へ	車中泊
4月17日(金)	早朝、北京着 白雲觀見学 帰国	

【参加者名簿】

I. S.	東京都	O. N.	大阪府
O. S.	岐阜県	K. K.	京都府
河本 公子	大阪府	K. S.	大阪府
K. K.	大阪府	高見 邦雄	兵庫県
N. J.	大阪府	N. N.	大阪府
前中 久行	大阪府	Y. K.	東京都

【中国側スタッフ】

ぶしゆんちん 武春珍 (緑色地球ネットワーク大同事務所所長)	ぎせいがく 魏生学 (緑色地球ネットワーク大同事務所副所長)
かくほうせい 郭宝青 (// 運転手)	おうへい 王萍 (// 通訳)
さいきやうらん 柴京雲 (大同市総工会副主席)	
ごえいあい 呉英愛 (通訳)	

O4月11日(土) 晴れ

【I. S. 記】

北京首都空港 → 王府井 → 北京駅 → 霊丘

ひたすら乗り物で移動する1日。羽田発の便が遅れてしまい、先に到着しているはずの関空発のみなさんを「緑の旗」をたよりに探すも影も形もなく、少々あせりました。なんのことはない、関空便も遅れていたのです。

空港から市街への道路周りがとても美しく、公園の中を走っているよう。たいへんなお金と手間をかけて整えられており、日本ではとても実現できないのだそう。“手間”を引き受ける人が日本にはいない、人がやりたがらない仕事をひきうける人びとがいる国の公園は美しい...という前中代表のお話し、これは帰国したら友だち全員に広めるつもりです。あたかも自分の考えのように(笑)。中国の寝台列車の印象を。インドに比べると格段にキレイで驚きました。シーツはピンとしているし、布団とまくらにちゃんと綿が入っている！(インドはほこりだらけのシーツにチクチクする毛布です)感動！ 帰りにまた乗るのが楽しみです。

今日食べたもの

機内食 ビール、ワイン、カップめん(紅焼牛肉麺) ←おいしい!! トマト、みかん←おいしい! ビール、ビーフジャーキー(私物)、するめ(私物)

【O. N. 記】

第1日目、日本から北京へ、さらに霊丘県へ入る。

中部空港1名

羽田空港2名

関西空港9名 北京空港で12名+1名(通訳の呉さん)

北京駅から列車で大同市へ5時17分発→22時07分着

大同市霊丘県 明珠国際商務酒店宿泊

空港から北京市内には専用の大型バスで移動する。高速道路にもかかわらず時速25km/hくらいのスピードしか出せない。慢性的な渋滞らしい。道路の両側にはたくさんの樹木が植えられていて、大同市の中とは思えないくらい美しい。道の近くにはレンギョウ(黄)・モモ(赤)・ライラック(紫)・八重桜(ピンク)等たくさんの花木でなごませてくれる。その外側にはポプラ並木が続き、まるで森のなかを走っている感じだ。それでも通訳の呉さんの話では悩みもあってスモッグもあり、子どもの教育にも不満が多く、海外へ移住する人も多いと聞きました。行き先はニュージーランド、カナダ、アメリカ、そしてシンガポール等といずれも英国圏のようでした。

話をきいているうちにいよいよ北京市の中心部にさしかかって建物がどれも個性的であり、変わったビルディングの展示会を見ている感じです。

道路はいつの間にか片側3+2の5車線となり、10車線の道路ということになりますが、ここでも路面が見られないほどの車のコウズイです。ここでも道路沿いにはたくさん植樹されていて手入れが充分されているようです。

ビルは球形のものや頭でっちなもの、壁面の凸凹なものもあり、何だか自分の頭が変になりそうな感じがしました。バスのなかでだれかが「世界中の建築家が北京に住みついていてお互いに競争している」と言っていました。北京からの列車は三段式の寝台車で仮眠ができて助かりました。車内では夕食にありつき、おむすび、カップラーメン、ミニトマト、ミニみかん、それにビールまであって楽しく語らいながらの旅でだんだんと会話がはずむようになり、よいツアーになりそうな予感がします。

以上

04月12日(日) 晴れ

【N. J. 記】

今日は雪が降るかもしれないと前日に聞いていましたが、朝から晴れてよかったです。ときおり吹く風が冷たく、強く、土けむりをあげていました。

朝のホテルでの食事から夜のうたげまで書くことがたくさんあります。感動したことを書き綴ろうと思います。でも今日はちょっと疲れたので最後までがんばれるかどうか...

朝ごはんではどれもおいしかったのですが、一番は豆乳です。あたためたあの豆乳はおいしかったです。それとスープ状になったいろいろなお粥も朝一日の始まりにおかずと一緒に身体にしみいっていきように思いました。そしてどういふ集まりできていたのか中国人の7~8人の女の人たちの食べている量が多いのと、ずーっと話をしているのが印象的でした。そのあと出発して南天門自然植物園へと向かいました。日曜日なのに国道を走るトラックが多いんですね。活気があり、中国のパワーを感じました。昔からの道の話、地層、植物の話も興味深く、植物園までの道のりは短く感じられました。

午前はオノオレカンバという木を植樹しました。ひとつひとつの作業、そして水をやるということがあの山の斜面でするのはたいへんなことと思います。今日植えた苗がしっかりと根付き、あの山の緑のひとつになればよいなと思いました。

午後は上に登るグループに入り、尾根につづく階段を上っていくと、その眺めは広く、日本では見られないように中国は本当に広いなあと思いました。でもわたしは高所がこわいので横道にそれていったときはどこまでいくんだらうと遠くの景色を見るのが少しこわかったです。

その後、上北泉村に寄り、きれいに咲くアンズの花に感動!! すこ〜し眠くなりながらホテルに戻り、夕ごはん前には GEN の活動のお話があり、砂漠と砂漠化の違いからはじまり、緑の地球環境センターの設立まで興味深うかがいました。

みなさんとの夕ごはんは食べ物もお酒もお話もおいしかったです。書ききれない体験や感動がありますが4月12日の部はこれでおしまいにします。明日はどんな1日になるのか楽しみです。

【O. S. 記】

今回は2年ぶりに2回目のツアー参加となりました。初回は興味本位な参加でした。しかし、目を追うごとに GEN の活動のすばらしさがわかるようになり、心に大きな財産を得た思いで帰国することができました。本当にありがたく思っております。とくに、植林活動のみにとどまらず、人生百般にわたる勉強をさせていただいたことです。そして、同じツアー参加者の立派な方がたとの出会いも私自身の宝となりました。

今回は、私自身、身体があまりすぐれないため、少しでも中国で健康になって帰りたいと思っております。最後に簡単ではありますが、中心者の方がたに暑く御礼申し上げます。

04月13日(月)

【K. M. 記】

朝8時30分 第一の目的地“懸空寺”に向けて出発。20分後高速道路に入る入口で道路が雪で閉鎖。いつまで待てば高速に乗れるのか知らせは全くなし。これが中国式!! 運転手の郭さんも思案中。下車してトイレ、煙草等をしていると、高速の門が予告なく開いた。まった時間はたった20分で助かった。

黄土高原のまったただ中の高速道路の周囲はアブラマツなどが植えてある。その道路に5km近くのトンネルを2つ抜け、“懸空寺”に10時20分ごろ着。まさに名のとおり石灰岩の岩肌に穴をあけて“空につるされた寺”である。72歳でこの寺に登りたかったが登るのを断念。登った人によるといろいろスリルありで感動してました。この寺は1,400年前、道教、仏教、儒教の三宗派の合作。

それから第2の目的地呉城村の“希望果樹園”でアンズの苗木を植樹。書記の説明は力がこもっていた。今年のアンズの収穫がよかったです。それから呉城村で昼食をいただく。魚も肉も野菜等盛りだくさんでビール、

白酒もあり美味しかったなあ。

昼食後、この村の小中学校一緒になった（1年生～6年生～9年生）の学校へ。この小・中学校はいま先生20人、学生60人ぐらいです。10年ぐらい前は学生は200人ぐらいだったとか。以前より生活がすこし豊かになり、県や市の都会に親と一緒に出張ぎに行く子どもが増えた。GENからのボール等の贈り物を学生にあげました。それから学生と我われ個人それぞれ遊びました。余談ですが、トイレの関係で我われ夫婦2人はみなより先に学校に。低学年の学生が我われの後に10人くらいついてきました。学校のトイレは男、女と分離されているだけで、中はまったく扉はなく、すべて公開です。私の連れ合いは眼が悪く、誰もいなかったのが私が女便所の便の穴の位置を確かめ、私が外へ出て連れ合いに報告。彼女がトイレに入ったあと、女の子が中へ。子どもたちワーワーと大きな声で彼女は尻は外で子どもに顔を向け「あっちへ」と言えなかったと……

最後に大同市の太陽光ソーラーパネル発電基地56ha、20メガワットを見ました。昨年ここで太陽光発電の国際会議が開かれたとか。立地は土地が塩分が多く作物はダメ、雨は少量の悪条件が幸いているとか。

おわりに

GENの行くところ、中国人の人はみなニコニコしています。しかし人によってじっと目を向けてくる人もいます。歴史を見ればここ山西省は日本が侵略で残酷なことをした省のひとつです。高見さんたちGENはそのような中でがんばっているんだなあ～と敬服します。

【高見邦雄記】

朝、ホテルをチェックアウトし、8時30分に出発して渾源県に向かうことになった。東河南鎮のところまで高速道路に乗る。この高速道路は山東省の榮成と内蒙古自治区の烏海を結ぶ長大なものだ。この靈丘と隣の河北省涿源県の区間は、山と谷ばかりで、トンネルと橋脚がたくさん必要なために、まだ開通していない。ここが完成すれば、靈丘県城から南天門自然植物園のあいだの渋滞は基本的になくなるので、待ち遠しいところだ。

靈丘から渾源への移動は、以前はずいぶん苦労したものだ。とくに数か所の峠で雪が降ったりすると、大渋滞が起こって、動きがつかなくなる。高速道路の開通で、そういうか所はすべてトンネルになったから、雪道の心配などはなくなった。

渾源西のインターをおり、懸空寺の参観にいった。70歳以上は無料、60歳以上は半額。通常は130元だったかな？

それから呉城村に向かったが、呉城村に着いたときは12時になっていた。昼食をちょっとがまんして、すぐに植樹の現場に向かうことになった。植えたのはアンズ。私たちの到着が遅くなったから、村の人がほとんど植え終わっており、私たちは1人あたりほんの数本を植えただけだった。

農家で昼食をとった。人数も少ないので、一軒にまとまって食べた。いつものように炕（カン）に上がり、小さな食卓をぐるりと囲む。ものすごい品数の料理がつぎつぎに運ばれてくる。とてもおいしかったので、私もつい食べすぎてしまった。大同では農家で食事がいちばん口に合うような気がする。

催促してビールを出してもらった。恒山王の白酒もでる。香りが濃くて、甘口だから、けっこう飲みやすく感じるようで、初めての参加者もよく飲んでいる。

昼食後の休憩時間に、村のうしろの浸食谷を見に行っただ。いつもよりちょっと北のところに行ったところ、浸食谷が二手に分かれて走っているのが見えて、フォトスポットとしてはこちらのほうがよかった。これで馬車でもきて、対照物になってくれるといいのだが。残念ながらこなかった。

今年のことが、4月10日には、アンズが満開になってしまった。いつもに比べ半月以上も早い。そのまま暖かくなってくれるといいのだが、5月3、4日になって寒波がやってきて、零下6度にもなったそうだ。零下2度までなら被害は少ないが、零下4度になると深刻な影響をうけるという。結局、幼果が凍って落ちてしまい、ほとんど収穫できなかったそうだ。

小学校に行って、子どもたちと遊んだ。全体としてはあまり盛り上がらない。O. N. さんが紙飛行機やストローと紙を使った竹トンボふうのものをつかって、子どもたちを集めている。さすがに準備のいいことだ。

盛り上がらなく感じた最大の理由は子どもの数が少ないことだ。全体で 50 数人しかいないという。1 学年あたり数人とのこと。数年前までは 200 人くらいはいたのに、急速に減少したのだ。

2008 年に BS 朝日が「よみがえれ！緑の大地～中国黄土植林プロジェクト 17 年目の挑戦」と題する開局 8 周年記念番組を制作したとき、この村を中心に取材した。一家の生活を撮りたいということで、学校でめばしい子どもに目をつけ、その子の家を訪ねてみたが、たいていは親たちが出稼ぎにでていて不在で、子どもと老人という家が多く、何軒も見送ったあげく、やっと一軒を見つけた。そのころは子どもはまだいたのだ。

どうも、子どもをつれて村を出て行く人が増えているようだ。それから、少しでもいい教育を受けさせたいといって、県城や大同市内の学校に送り出す家もあるそうだ。それだけの経済的な条件ができたのは、悪いことではない、という説明があった。

それにしても、この変化の急なこと。農村の学校としてはこの村はとて条件が整っていたし、先生たちも熱心に教えていた。県内で子どもたちの成績がいいというのが、村や学校のジマンだったはずだ。

そのまま車は北に向い、大同県を目指す。途中に高速道路の入り口があるのだが、そこをやり過ぎて、地道を走った。せっかくだから、桑干河とメガソーラーをみてもらいたいと思った。

固定橋を渡るとき、ゆっくり走ってもらって、桑干河を見る。案の定、水はほとんどない。

メガソーラーのところで車を止め、降りて見学した。その規模にみんな驚いている。当初の計画どおりだと、発電能力は 60 メガワットになっているはずだ。写真を撮ったのだが、パネルとわかるように撮れば、広がりにはでてこない。広がりを撮ろうとすると、平面での撮影では、パネルが小さくなって、なんのこともわからない。

帰国してから Google Earth をみて、びっくりした。私たちが現場で見ているのは、ほんの一部で、しかも規模の小さなところにすぎない。北側のもうちょっと奥まったところに、巨大な本体がある。縦横の長さが 1.7km×1.4 km くらいもある。

霊丘から渾源にくる途中にもたくさんの風力発電が見えた。中国でこのような取り組みがあることは日本ではあまり知られていない。

【前中久行記】

昨夜は（といっても実際はすでに 14 日）大同市街、雁北賓館に泊まる。夜になり部屋が寒くなってきた。エアコンのコントローラーをいろいろ設定してみるが、あたたかくなってこない。故障していると判断、あきらめて寝ることにした。しかし寒くて寝られない。部屋を変えてもらうべく、フロントに連絡する。その結果わかったこと。暖房は 4 月 1 日から停止しているとのこと。「寒くてがまんできない」と強く伝えて電話を置く。スタッフが部屋へやってくる。掛け布団の有りかを示して、「これを使え」とだけ告げてさっさと帰って行った。

昨年の 4 月はこのホテルで暖房が入っていた。エネルギー節約のため 4 月以降は暖房停止のおふれでも出ているのかと思うが、昨日の霊丘のホテルでは暖房されていたので、それでもなさそうだ。仕方がないので使い捨てカイロを布団の中へ投げ入れて寝ることにした。大同は観光に力を入れていると言っているのに、ホテルの対応がこれではね。

O4 月 14 日（火）

【Y. K. 記】

早ツアー 4 日目の朝。何やら民謡風の歌声で目が覚める。あとからわかったが、妙齢のお嬢さんがたが（含む元妙齢のかた）集まってカンフーともモダンダンスともつかぬ体操（？）をさまざまなジャンルの曲に合わせて実行中。誰も見向きもしないのが印象的。

朝のお勤めを済ませて（このホテルも霊丘のホテルと同様トイレットペーパーを節約している、と思ったらどうやらこの大きさでも未使用品の模様。大きいことが好いことの中国で「なんでこの大きさ」と腹立たしい

が、それほど紙は貴重であるのかもしれないと一人納得) 期待値大の朝食へ。期待にたがわず量といい品数といい、まさにケンランゴウカ。宿泊客のご婦人方の話声が、料理の絢爛豪華度を一層高めている。

バスで「緑の地球環境センター」へ。すでに道路は大混雑。不思議なことに、どう見ても歩道にしか見えないうところにたくさん車の車が駐車しており、人とバイクが入り乱れてクロスする。川の途中がせき止められてプール状になっている川を渡って 30 分ほどでセンターに到着。途中ビル群のなかに取り残された旧市街が、掘り起こされた遺跡のように見える。次々と新しい道ができるためか、センターへの入り口を運転手が見失ったように見えたのは気のせいかな。雑然とした道路沿いに、忽然と緑の畑が車窓から見えたときはなぜかホッとした。

まず、高見さんから、大きな地図で初日からの足取りを説明してもらおう。このとき初めて大同市が T 字形であるのに気がついた。南からだんだんと北上し、すぐ北はもう内蒙古自治区なのだ。1992 年より、バラバラと各地で行っていた事業をより効果的、効率的におこなうためにパイロットファームを無償、盗電、盗水で開設し、その後紆余曲折を経て、現在の地に時価 30 億円の土地を 30 年貸借して今に至った話が面白おかしく(失礼!) 語られた。

そのあとでみなさんお楽しみのお酒の時間。調理場をのぞいてみたら大きな「かまど」にこれも大きな石炭(?)の塊が放りこんであり、ご婦人数人が忙しく料理中。すっぱん、例の黄色の燕麦ギョーザ、豚、羊、魚、そのほか珍しい数々の野菜料理にみな大満足でした。

しばらくの休憩のあとにいよいよメインの植樹作業が始まる。アブラマツの苗のビニールを取り外して埋め、土をかける。すでに穴があけてあるとはいえ、かなりの重労働。汗と埃にまみれた作業は終了。50 本は植えたろうと思ひ、魏副所長に何本植えたのか確認したら 20 本くらいだろうとの答えにそんな筈はなかろうと鼻の穴をふくらませていると、「植えた数は問題ではありません。いかに丁寧に一本一本植えていったかが大事なのです」と前中先生の神の声。納得です。

みなさん心地よい疲労感のなか、バスでホテルへ。途中、生活市場に寄る。ビルの谷間にぽっかりと異次元の空間。量り売りの酒がかめに入れて置いてあったり、スルメを水で戻したピンクのイカ、はたまた血が混ざるのでチョコレートムースのような豆腐 etc... 楽しい経験に、次回からのメニューに正式決定の由。

そしていつものように楽しい夕食で今日も一日が終わりました。

このツアーは植樹を体験するのが目的のツアーであるが、植物については勿論のこと、歴史、その他の雑多の知識を収穫しうる旅であると思う。

ex.・漢の劉邦きょうとうと匈奴こつとの冒頓ぼくとん単于の白登山の戦い、特に漢の軍隊が包圍網を脱するのに美人画を含ませてわいろを贈った話。

・植物はアナログ的に変化するのであるから個体一本一本を観察しても他と区別がつかないのであるという話。→あとで前中先生に、かなり大きなマツの苗を示され、「もう見分けがつくでしょう」と言われるが、やはり見分けがつかなかったこと等など。

最後に感じたことを二点。

1. 大同市の高層マンションや豪華ホテル群と、霊丘の貧相な農業や古いホテルの落差の大きさ。また、おびただしい新車の洪水と、無秩序な停車や信号の混雑の落差を見せつけられて思うことは日本が明治維新を経て 100 年以上かけてやってきたことを短期間のうちに、なおかつこの広大な国土と人口を抱えて成し遂げようとしているのであるから、いたしかたないと思う反面、早晚、地方財政、ひいては国家財政は持たないのではないか、また、変化に取り残された庶民の恨みつらみはいつか爆発するのではないかと思わざるをえない。そうならば、その爆発のエネルギーのほこ先をそらすために、過去の忌まわしい歴史に、そして隣国にほこ先を向けるのは為政者の常である。その流れに棹指すためにも GEN の草の根の活動は重要であると思う。

2. 30 億円相当の土地を無償供与されているとはいえ、GEN が維持費、人件費を負担している今の規模の活動を続けるのは大変なことであると思う。さりとて GEN の活動が緑化推進の実験地であるということに鑑みるに、派手に営利事業を前面に出すことも困難であると思われる。一刻も早く、種々の試み緑化に有効である

ことが学術的に行政に認められ（政治的なポーズとしてだけではなく）助成金や募金に頼る必要がなくなる状況が訪れることを祈る次第です。

04月15日（水）

【K. K. 記】

大同に来るのは2012年8月以来である。宿の雁北賓館は初めてだが、大同市の市街地全体が分かりやすい位置で、朝の散歩でこれまで来た場所が頭の中でよく整理できた。昨日の朝は、同室になった尾崎さんと一緒に城壁の中を散策し、まだ古いままの市街や、建て替えられて新しくなった町並みを見ることができた。今朝はひとりで御河を渡り、南下して一本南の橋を渡るルートで歩いた。橋の上からホームレスの住まいらしきものを発見し、そういう人もいるのだと認識を新たにしたいところである。

春の大同は初めてで、レンギョウの黄色とモモだかサクラだかのピンクが目につく。朝食を済ませ、下痢することもなく快便である幸運に感謝しながら、出発準備を整えてエレベーター横に発見した階段で（5階から）下まで降りる。階段の段数は、2階までは各階ごとに22段で、1～2階間は24段である。

飲料水確保のため、出発時刻は15分遅れの8時45分。バスで采涼山へ向かう。途中で前中代表から三十里鋪の土累の説明があった。昔の軍隊の駐屯地で十里ごとに設けられている（た）とのこと。その大きなものは午後に見学予定である。約40分で采涼山の植林地に到着。ここのプロジェクトは地元の植林に協力するかたちのもので、1996年から6年で230ha（haあたり3300本）に50万本以上のマツを植えた、と高見事務局長から経過の説明があった。この地は南斜面である上に、地元は貧しく（年収159元）、管理もできないという理由で、中国側関係者はみな反対したが、南斜面しか残っていなかったので実施した。南斜面は冬に日が当たって氷が溶けたり凍ったりするため、木が育ちにくい、うまくいった要因はいくつかある。ひとつは地元の在来の方法をきちんとやったこと。在来の方法は、7月～9月に斜面に横に幅60cm深さ30cmの溝を3m間隔で掘り、夏の雨を貯めるようにし、翌年の3月中旬～4月に植えるというものだ。これに、GEN顧問の小川眞さんによる菌根菌の技術が加わった。さらに、現地の党書記が現場を重視する人が来て、熱心に管理を行なわせた結果、うまくいった。苗は小さいもので、越冬させるため、11月初めに土で埋め、4月に掘り出すという作業をおこなった。これはウサギにかじられるのを防ぐ効果がある etc.

前中代表からの説明.....今後、間引きや枝打ち等が必要になってくる。既に小さい木に枯れているものが出てきている。水の奪い合いが行われている可能性が考えられる。また、木にも寿命が（ないと考える人も多い）がある。木の平均寿命は、枯れる割合の逆数である。100本に1本が1年間に枯れるとすれば平均寿命は100年である（平均寿命だから100年経てばみな枯れるというわけではない）。

マツの間にサージ等を植えた。これは nurse plant であり、初期にマツを保護するが、マツが大きくなると陰になって枯れる（そうなった）。この植林地の奥に「カササギの森」がある。ここへ移動後、高見事務局長から説明があった。南北4km、東西2kmでGENの実験林場である。マツを植えており、その間にナラを植えている。はじめはナラは伸びなかったが、最近伸びるようになった。菌根菌の影響がありそうだ。

これらの見学の後、大同市内で昼食—雑穀を使った料理とのこと。ワーキングツアーだがグルメツアーの様相？

昼食後はバスで1時間くらい北上し、万里の長城の見学である。土累で囲まれた村が長城の内側にある。土累は明の時代のもので、残されているなかで最大（？）のものだとか。土累内は風がよけられてよいが、外に新しい村ができています。

訪問したあとに風が強くなり、砂嵐の様相を呈してきた。1990年代の気候のようだとのこと。最近はなかったらしいので、今日のツアーは幸運（？）だったようだ。吹き上げられた黄砂は2日間で日本に到達することだから、私たち（のうちの半分＝6人...あとは後日帰国だから間に合わない）が帰国したところに今日遭遇した黄砂と再会するのだろうか。

夜は大同市内で羊のしゃぶしゃぶである。みな満腹、満足して宿に帰りついた（と思う）。

大同市内は未だクレーンが立ち並び、大改造中である。城壁内の古い家屋はそのうち無くなるのだろう。高層住宅に住むようになったときの人びとの関係はどう変わるのだろうか。午後に訪れた村では、足許のおぼつかない老人が自転車にもたれながらヨタヨタと歩く姿が見られた。あの老人は村の中で暮らしていけるのだろうか、都市化した世界ではどうなるのだろうか。ヒトは「自然」との関係を必ずしもうまくやっていない。うまくいくのは偶然に条件がそろった場合だけだし、うまくいっていると思っているとんでもない間違いをしでかしていることもある。異文化に触れていることは、自分の生活を見直し、相対化するのに役立つ。「緑化」を通じた異文化交流は、まだ役割を終えていないだろうから、なんとか引き継いでいきたいものだ。……と思いつつながら筆じゃなく、ボールペンを置くことにする。酔っているので書いていないことがたくさんありそうだが、ご勘弁を！

【N. N. 記】

前中先生から引き継いで本日＝4月15日（水）日誌です。

8:30AM ホテル発 カササギの森へ。途中で植林地の来歴のお話 by 高見さんと前中先生。マツの植林成功の理由は不明。

植林開始から15年ほど経過で樹高は3.5mほど。林業局もあわせて計2,000haほどに植樹。成功例として取り上げられることも多く、林道を舗装。敷地内に墓がいくつもあり、山火事へのそなえに気をつかう。監視員が見張り。その外には野ウサギが苗を食害し、その対策に苦勞。林業局は数年遅れでGENの技法に学びながら独自の技術に挑戦。お互いに競争しながら植林面積を拡大。植林1割、管理9割が成功の秘訣か？ 党書記の見解。いまのところ病気や食害はないけれど、2,000haのマツの純林となるとそれへの対策も検討が必要（病害虫防除）。カササギの森の管理棟へ行き、全体を見わたす。多様な条件があるところ、？がけ？の下の河川敷から山の上まで、気候条件によっては土石流の被害も発生。ゴルフボール大のヒョウでそのあとに土石流、下流の村で4名死亡の被害があり。河川敷に手をつけるのは慎重な考慮を求められます。おそらく南天門自然植物園と異なり、生態を保護しているだけでは植生の回復は困難で、人工的な植林が必要ではないか？ いろんな動物がこの森（＝カササギの森）に住むことはいいサイン？ 森の回復が先か、多様性に配慮した植林をして極相林に行くのがいいのか？ たぶんいろいろ試してみるんでしょうね。まだ10数年ですものね。いずれにしても2,000haのまとまった植地が再生されたことは気象条件や地域の生態には若干の影響があってもおかしくないのかな？ 植物（＝木）だけでなく他の生態を構成するのも例えばウサギとかオオカミとかシカとかについても調査をしてみたら面白いでしょうね。中国側の理解を得るのは外国人が直接手掛けるのは困難かもしれません。中国人の留学生に生態調査の手法を学んでもらってそれで彼らに調査してもらうとか。でも中国の人にお金にならない研究の価値を理解してもらうのは日本より難しいかな？ 今から50年後にはカササギの森にはどんな生態系があるのでしょうか？ 昔の（＝2000年前）の生態系が立花先生が考えていたようによみがえることがあり得るのでしょうか？ “昔森林があった土地だから植林をすれば成功するチャンスがあります”と先生は言っていたように思います。人の寿命は100年、樹の寿命は長ければ200年、ヒノキやスギでも200年300年、人よりずっと長生きします。ヒトはなんでもコントロールして自分の思いどおりにできるように思っているけれど、それはお釈迦様の手のひらの上の話。謙虚になって自然には接する態度が必要です。

今回初めて家内と一緒にツアーに参加しました。これまで個人旅行の経験はあってもツアーは初体験です。高見さん、前中先生はじめみなさんからいろんなことを学ばせていただいています。いつも仕事の出張ではひとりということも多いのですが、同行の方がいるのもいいものですね。それになにより手配をすべてやっていただけるのは助かります。河本さん、呉さん、GENの中国側のスタッフのみなさん本当にありがとうございます。余計なおしゃべりが多すぎてみなさんに迷惑かもしれませんがご了承願います。いつもひとりで旅行しているとうなるんです。日本語でお話ができるなんて！！

それでは最後までよろしく願いいたします。

P.S この後はだれも引き継ぎはないので続けます。By N.N.

カササギの森のあとは市内に戻って五穀のレストランで昼食。そのあとは砦と万里の長城見学。西安の北へ小一時間の村(名称不明)の砦の後ろ、入口に立派な石碑。村の委員会が設置し(その詳細は Photodata 参照)、門の上に裏側から上がって見学。村は土塁の中遠景の山(丘?)の方に狼煙台が左右に1基づつ、遠くには石炭列車も見える。機関車2両で100両けん引。このころから風が上がって空が暗くなる。天気 downstairs 強風に。村の中の道を通って反対側の門へ行く。外にはロバ1頭。こちらも煉瓦積みアーチ構造。砂が飛ぶような強風。そこから中ホコリまみれ。車で次の場所へ移動。万里の長城が里へ下ったところ。来る途中も左側に土塁が続き、ところどころそれが切れていて出入口になっている。長城も里では高さ4~5mの土塁。強風で坂を上がるのも大変な状況。空は黄土色。1990年代以来の気候とのこと。我われは天気にも歓迎されています。ホテルへ戻って休憩。6時半に羊のしゃぶしゃぶのレストランへ。スープにたっぷりのトウガラシミソを入れ、赤い色になる。2部屋に分かれての食事。おいしくて満足。明日はいよいよ大同最後の日。石窟の見学、そのあとは南郊区の旧環境林センター見学。お土産調達の予定です。

O4月16日(木)

【N. N. 記】

本日の行動は次のとおり。

- ①雲崗の石窟
- ②万人坑
- ③旧環境林センター跡地の公園の見学

雲崗の石窟は7年前とすっかり様変わりしてびっくり(7年前に訪問)。あの時にはなかったものが沢山できていて、アプローチが長いこと。前は道路を渡ればすぐに石窟に入れたのに！ 石窟の詳細はガイド参照。次は万人坑。共産党宣伝部の.....コメントは控えます。

③旧環境林センターの面影は管理棟の建物だけ。樹木が伸びて風景も見えなくなって残っていたのは給水塔、管理棟ぐらい。背の高い樹のしげみも残っていただけで周辺も様変わり...水の供給のプラスマイナスがどうしても計算があわない????

中国人の関心ごととは飲む打つ買うかと思っていたら最近はずいぶん違うようで..... 通訳の王さんは心臓ペースメーカー入りで終わったら北区。総工会 No.2 は次の宴会へ? それとも家庭へ? どちらでしょ。党の綱紀粛正でみなさんこれまで通りとはいかないようでとまどっている? 前回の中国は7年前。違いもあれば同じところもあって、中国は相変わらずおもしろいところです。ときどき中国語も勉強してきてみようと思います。みなさんとは今晚でお別れですがお元気で!! 道中気をつけてお帰り下さい。次回来るときは中国語を勉強したら個人旅行もますますおもしろそうです。変化を見るのもたのしいですし、南天門自然植物園へ行けば時間の経過を正確に知ることできるでしょう。

高見さん、前中さん、再見!!

【河本公子記】

午前中、雲崗石窟見学。通訳の王さんは相変わらず元気でした。2月に家族で日本へ旅行したそうで、写真を見せてもらいました。大阪、奈良、神戸を見てまわったとのこと。

行くたびに料金設定が変わる雲崗石窟の入場料ですが、今回59歳までは120元、60歳以上は無料になっていました。雲崗石窟に行くとお釈迦様の生涯に思いをはせてしまいますが、そんな話をしていたらIさんに「聖☆お兄さん」(ブッダとイエスが立川のアパートをシェアし、下界でバカンスを楽しんでいるという設定の漫画)という漫画があることを教えてもらいました。帰国したらさっそく読んでみようと思います。

午後、万人坑と口泉植物園を見学。万人坑では折り紙の鶴やお花を用意しておけばよかったなと反省。口泉

植物園では旧環境林センターの管理棟とシダレヤナギを見ることができて懐かしかったです。散歩をしている地元の人びとがけっこういて、健康のためなのか後ろ歩きをしている人に出くわしました。私も挑戦してみましたが後ろが怖くてすぐ断念しました。植物園は憩いの場として今後大いに発展していったらいいと思います。その後、ウォルマートで買い物をし、ホテルに戻りました。

大同最後の夕食は総工会副主席の柴京雲さんも参加し、なごやかに食事を楽しましました。途中柴さんが大同の風についての歌を披露してくださり、美声にみな拍手喝采。そのあとK. K. さんがやはり風についての歌を披露し、(「誰が風を見たでしょう」という名前だそう)こちらも大好評。日本語、中国語の歌声が響きわたる宴となりました。食事のあとは荷物をまとめて、夜行列車に乗るため大同駅へ。K606 次大同発天津行の列車で北京へ。車内では当然のように寝酒を楽しむみなさん。(たしかさっきも白酒たくさん飲んでたはず...)健康の秘訣は飲酒にあり? などと思ったり思わなかったり。夜汽車に揺られて就寝。

04月17日(金) 晴れ

【河本公子記】

5時起床。到着時間が早まるとの連絡がありましたが、定刻の5時23分に黄村駅到着。ここからバスでサウナに向かいます。砂嵐のあとでしたが、今日の北京の空はそんなに霞んでいませんでした。バスで30分ほどでサウナに到着。サウナの名前は日本語にすると「セーヌ河スパ倶楽部」のような感じになると思うのですが、サウナの入り口でお出迎えている服務員の女の子は頭にティアラ、ふわふわもここのケープに紫のロングドレスといういでたちでした。まるで舞踏会へ出かけるお姫様のよう。こういう感じが中国人が考えるセーヌ風なのか?

サウナは早朝ということで私たち以外お客はおらず、貸切状態。シャワーを浴びたあと、みなでスチームのサウナに入る。サウナのなかで、どういう流れでかは忘れましたが中国映画と中国ドラマの話になり、張芸謀の新作「妻への家路」がすごくよかったとか、山西省出身の映画監督ジャジャンクー(賈樟柯)の話とか、あーだこーだと盛り上がり、サウナの蒸気もあって議論は白熱気味に。はたまた数年前に中国で放送された「蝸居」というドラマ(日本では「上海、かたつむりの家」というタイトルで本が出版されています)についてなどなど。気がついたら汗がぼたぼた流れていました。「蝸居」というドラマは中国で議論を呼んだ話題作だったそう。わたしは本を読みましたが、中国大都市の地方出身者の生活ぶりや住宅事情にはじまり、官僚汚職や不倫問題などを盛り込んだもので、中国の現在を理解するひとつの教材になりそうなのでおすすめです。

午前中はサウナから歩いてすぐのところにある道教のお寺「白雲觀」を見学。こちらは年齢問わずみな10元の入場料。春の暖かな日だまりを浴びてライラックやボタンの花が見る人の目を楽ませてください。なでると縁起がいいらしいサルの彫刻や、金運に恵まれるとかいう橋の下にあるドラで銅銭投げに夢中になったりしてあつという間に時間が過ぎました。この寺は観光のためだけではなく、現役の修行の場でもあるので、かっこいい服装の修行僧がすたすた行きかかっていました。こういうのが外国人からみた中国的クールだと思うんだけど。

白雲觀を出て、北京で旅を続けるKさん夫妻とお別れし、空港へ向かいます。北京は相変わらずのひどい交通渋滞でしたが、1時間半ほどで無事空港へ到着。空港に向かうバスの中で、通訳の呉さんにみなが質問するかたちで自然とお国事情講座の時間に。中国には56の民族があり、呉さんは漢族ではなく朝鮮族に属するのですが、中国の少数民族と聞くと、日本人はチベットや新疆などの報道からしいたげられている存在、と思いがちです。でも中国政府は少数民族に対する優遇政策をしっかりとこなっていて、一人っ子政策のなかでも2人目の子どもを産んでいいとか、大学受験では点数が加算されるとか、日本ではあまり知られていない(と思われる)多民族国家としての一面を知ることのできたよい機会でした。

12時前に空港に無事到着。チェックイン、昼食をすませ、Yさんが奥さまへのお土産の習字の墨をやっと見つけて購入。筆、硯、墨、印鑑のセットで498元ほどだったのでしょうか。見た目だけでは質の善し悪しはよくわからず、値段の相場もわかりませんでした。印鑑の名前をその場で彫ってくれるサービスもあり、いつか

わたしも欲しいな、などど思いました。

帰りの飛行機では、出されたものは残さずたいらげ、食後のお茶もコーヒーも両方しっかりいただくK. K.さんの胃袋と、乾燥した機内でいつまでもずーっとしゃべり続けていられる中国人のノドに感心しているうちに無事関空に到着しました。行きも帰りも乗客は圧倒的に中国人が多く、関空の入国審査では「foreigners」の行列の長さで日本人の数の少なさが対照的でした。ちょっと前まではANAの飛行機には日本人のほうがたくさん乗っていたと思うのですが。

今回のツアーは体調不良者もなく、迷子もなく、パスポート紛失なども発生せず、みな無事で帰国することができました。こんなにありがたいことはありません。みなさんの自己管理能力の高さのたまものです。感謝感謝。

【K. S. 記】

あっという間の7日間でした。GENの事はニュースで読みましたが活動はあまり知りませんでした。それに視力の弱い私に出来ることかとの思いもありました。しかし主人もいっしょなら参加ぐらいは出来るのかなと、思い切って参加しました。団のみなさまにはずいぶんお世話になり、また、みなさんとの談笑も楽しく、ありがとうございました。今振り返って参加してよかったとの思いを深くしています。

私は木や花についての知識は本当にうとく、教えていただくことばかりでとても勉強になりました。高見さんをはじめ、前中先生、河本さん、中国側のスタッフのかたの木や花に対する深い愛情を感じることができました。そして中国現地の方がたへの思い、発展を願われて23年間活動されての現在があるのだということを、ほんの一端ではありますが感じる事ができました。

今後ますますの発展をお祈りするとともに、私なりに応援させていただければ嬉しいなと思います。

この記録は、緑の地球ネットワーク 2015年黄土高原ワーキングツアーに参加したみなさんがツアー中交代でつけた日誌と、一部参加者より事後に寄せられた手記をまとめたものです。一部の漢字・仮名遣いや句読点の使い方、改行の仕方、固有名詞の誤記等改めた部分もありますが、文章表現は原文のままです。ただし、簡体字（中国の略式漢字）は編集の便宜上できるかぎり相当する日本の漢字に改めました。

2015年10月
緑の地球ネットワーク